

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	陳蕙貞『漂浪の子羊』に描かれた女性たち：光復後初期台湾女性文芸の発見
Author	豊田, 周子
Citation	中国学志. 33 卷, p.51-80.
Issue Date	2018-12-20
ISSN	0913-3151
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学中国文学会
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

陳蕙貞『漂浪の子羊』に描かれた女性たち ——光復後初期台湾女性文芸の発見

豊田 周子

0. 問題の所在

日本の植民地統治下の台湾では、「国語」としての日本語教育が段階的に徹底されていった。しかし、そのような過酷な言語環境下にあっても、著名な男性作家は幾人も輩出している。一方で、女性作家はわずかに二、三を数えるにすぎない。同時代の中国文学とくらべても、台湾文学において女性の書き手が極端に少ない事実は、植民地の言語・教育政策と、漢族系社会や植民地を通じて影響を及ぼした日本社会における伝統的な女性軽視の観念とが、重層的に合わさり生じた現象といえる。とくに、文学創作という高度な言語運用能力を求められる作家業における性差は、日本統治期以降、台湾が中華民国に復帰し、日本語から中国語へと「国語」の転換があった光復後初期(1945～1949)に顕著に見られる。それは、舞踏や絵画など他の芸術の分野では、秀でた台湾女性芸術家が登場していることに比べても明らかであろう。

従来台湾文学研究において、例えば、台湾女性文学研究の代表格である邱貴芬は、台湾の現代女性文学研究を著しく進展させてきた。また、台湾文学研究の第一人者である陳芳明は、著書『台湾新文学史』(2011)のなかで、特別に女性文学に関して一章を設けるなど、台湾文学における女性文学の重要性を強く押し出している。日本でも、中国文学研究者の白水紀子らが、台湾現代文学に関して、ジェンダー・ポリティクスとセクシュアリティの研究を精力的に進めてきた。¹⁾

¹⁾ 邱貴芬「従戦後初期女作家的創作談台湾文学史的叙述」(『中外文学』29巻2

ただしいずれの研究でも、1950年代以降の作品が取り上げられるのが通例となっており、光復後初期の女性解放運動とも深く関わる当時の女性文芸について触れられることはなかった。光復後初期の女性による文学創作は、女性史学的見地からその存在が指摘されることはあったが、文学研究の対象となることは長らくなかったのである。

一方、論者が近年行ってきた調査により、当時女性が書いたと思われる文芸作品が少なからず存在することも分かってきた。²⁾

以上のような前提のもとに、本稿では、光復後初期の混乱により歴史のなかに埋もれてしまった、台湾女性による主体的な精神活動を発掘しその文学史的意義を明らかにすることを目的として、当時活躍した数少ない女性作家の一人である陳蕙貞（通称：陳真、1932～2005）が書いた日本語小説『漂浪の子羊』³⁾のテキスト分析を進めてゆく。ここでは、女性像の検討を中心に、主に「母」と「妻」の二つの役割のはざまで揺れ動く台湾「新女性」の姿や、中国人として日本で育った台湾籍の少女の複雑な心性に焦点を当て、光復後初期における台湾女性の主体性⁴⁾の一端を検証したい。

期、2000年、313～335頁）、陳芳明『台湾新文学史』（聯経出版、2011年）、科学研究費：基盤研究（C）（21520365、白水紀子研究代表者）「現代台湾文学にみるジェンダー・ポリティクスとセクシュアリティの編成」の一連の論考を参照。

²⁾「光復後初期台湾における女性文芸の発見——『台湾新生報』『台湾婦女週刊』欄掲載詩の意味」、野草』百号記念号編集委員会編『中華文藝の饗宴』、研文出版、2018年11月、340～369頁。「光復後初期台湾文學與「新女性」形象——一試論吳濁流〈ボツダム科長〉中玉蘭的地位」、陳惠齡主編『伝統與現代——第一屆台灣竹塹學國際學術研討會』（萬卷樓）、2015年5月、435～472頁。「光復後初期の台湾における文化再建——楊遠の作品改訂を例として」、『中国21』（愛知大学現代中国学会）、第39号、2014年、125～146頁。「光復後初期の台湾文学と創られた台湾『新女性』——吳濁流『ボツダム科長』の玉蘭の位置」、『中国学志』（大阪市立大学中国学会）、大過（第28）号、2013年、1～38頁。

³⁾本稿で使用するテキストは、下村作次郎・黄英哲主編『漂浪の子羊 戦後初期台湾文学叢刊1』（南天書局、2005年）である。

⁴⁾本稿で用いる女性の「主体性」とは、女性が自主的に考えたり行動することにより、自らの人生に当事者として向き合おうとする意識を指す。ただし、それは必ずしも具体的な身体的行為を伴わないものとする。

1. 陳蕙貞と『漂浪の子羊』

1.1. 陳蕙貞略歴

日本の中国語学習者のなかには、NHK ラジオ中国語講座の陳真講師の名前を聞いて懐かしく思う人も少なからずいるだろう。そして、彼女の自伝的作品『柳絮降る北京より』⁵⁾ や、野田正彰氏による伝記『陳真——戦争と平和の旅路』⁶⁾ が公にされたことで、この女性が本名を陳蕙貞という台湾籍の人であり、戦前の日本（東京）で生まれ暮らしていたことも今や知られるところとなっている。日本、台湾、そして中国を縫うように移動して生涯を送った陳蕙貞の詳しい足跡については、先の野田氏による伝記や復刻版『漂浪の子羊』⁷⁾ に付された「陳真年譜」⁸⁾ から知ることができる。本節では、これらの先行文献を踏まえ、『漂浪の子羊』出版にいたるまでの彼女の前半生を概観してゆく。

陳蕙貞は、1933年6月14日⁹⁾、東京の荻窪に、父・陳文彬（1904～82）と母・何灼華（生卒年不詳）の次女として生を受けた。言語学者である父の陳文彬は、台湾高雄の岡山出身の人で、祖父の代に福建漳州から移民し、製糖業により大地主となった。だが日本の統治が始まると、この土地は植民地当局により収奪され、「西来庵事件」の蜂起軍に資金援助をした廉で、祖父は当局に捉えられ拷問のすえに亡くなってしまう。¹⁰⁾ このような幼少期の過酷な体験を経た文彬は、台中第一中学（現：台中市立台中第一高級中等学校）を卒業すると、上海の復旦大学に進学する。そこで古代文字学や言語学、社会学を専攻す

⁵⁾ 東方書店、2001年。

⁶⁾ 岩波書店、2004年。

⁷⁾ 前掲『漂浪の子羊』。

⁸⁾ 前掲『漂浪の子羊』収録「増補」下村作次郎作成「陳真年譜」。

⁹⁾ 前掲『陳真』(103頁)によれば、これまで陳真（陳蕙貞）の生年は、1932年6月14日とされてきたが、これは父の陳文彬が一年くりあげて登記したものであったという。

¹⁰⁾ その他にも、親族二十数人が逮捕され、義理の兄弟二人が拷問を受け廃人となったという。（『陳真』、18頁）

るかたわら、マルクス主義の洗礼を受け、中国人として愛国の立場を堅持するようになり、日本の敗戦まで台湾の中国復帰を願い続けた。上海時代に文彬は、中国共産党地下党員に日本語を教えていたことで、汪兆銘政権から目をつけられ、東京に居を移さざるを得なくなる。東京では法政大学に職を得て古代中国文学の研究に専心し、藤堂明保（1915～85）や倉石武四郎（1897～1975）といった日本中国語学の碩学たちや、野上豊一郎（1883～1950、英文学）や妻の野上弥生子（1885～1985、作家）などといった知識人とも親交を結んだ。

母親の何灼華は、台湾嘉義の名家の出身で、「昭和医学専門学校」（現：昭和大学、東京）を卒業した才女であった。灼華は医者となるも繊細な性格ゆえにその任に耐えられず、「昭和薬学専門学校」^{11）}に入りなおして医師免許を持つ薬剤師となった。

文彬と灼華は東京で出会うが、二人の結婚は何家の猛反対に会い、灼華は実家から勘当されたすえに文彬と一緒にいる。文彬は、自分のライフワークである古代文字学の研究を継ぐ男子の誕生を切望するが、灼華との間に生まれてきた五人の子どもはみな女子だった。封建的な男尊女卑の観念を有する文彬は、次女蕙貞の誕生時も、産院に到着した後生まれた子が女子だと知るなり、妻子の顔もみずに帰ってしまうほどであった。また後には、結核を患った蕙貞が入院した際にも、同じ病院に入院していた知人を見舞いながら彼女には面会せずに帰ってしまったこともあった。女性を軽んじる父親の心ない行いは、家族の心に深い爪痕を残した。そして父の考えのもと、蕙貞は5歳の時に父の親友・堀江邑一（ほりえ・むらいち、1896～1991、経済学者）の家に、国籍や名前を変えることを許されないままに養女にだされ^{12）}、12歳まで経堂（東京世田谷区）にあった堀江家と、荻窪の実家を往来し

^{11）}『陳真』（26頁）にはこう記載されるが、「昭和女子薬学専門学校」（1930年に東京目黒区に設立。現：昭和薬科大学）のことか。

^{12）} 陳文彬と何灼華の間に生まれた五人の娘のうち、三女も叔父の家に養女にだされ、四女と五女は幼い時に肺炎で亡くなったという（前掲『陳真』、19頁）。

ながら生活することとなる。このような実父には心理的距離のあった彼女だが、優しい養父の堀江にはそばを離れないほど懐いたと言う。一方で蕙貞は、この東京暮らしの間に、父の知人・谷川徹三（1895～1989、哲学者）の長男で日本を代表する詩人となる俊太郎（1931～）と知り合い竹馬の友となる。また崔承喜（1911～69）や蔡瑞月（1921～2005）の学び舎として知られる「石川猯舞蹈研究所」で舞踏を数年の間学ぶなどしている。¹³⁾

蕙貞は姉とともに、日本人児童の通う小学校に通ったが、学業をししばし中断せざるをえないほどの民族差別を常に受けた。そのため、通学できない期間には、実家で父から中国語や中国史また中国文学の手ほどきをうけ、また養家では堀江の妻・律子や親類の女性たちから、日本文学や詩歌を習い、その豊かな文才を育てていった。戦争終盤時期に東京空襲が激しくなると新潟に学童疎開し（1944年）、さらに母・姉とともに甲府（山梨県）にも疎開した。

終戦の翌年1946年、陳一家は父・文彬に連れられて台湾に帰郷する。¹⁴⁾ この時、蕙貞は父の意向で堀江家に残されそうになるが、母が泣いてそれを阻止したと言う。当時13歳であった彼女が、台湾行きの船を待つ間に書いた小説が『漂浪の子羊』であった。帰台後、中国語が書けた蕙貞は、台北第一女子中学（現：台北市立第一女子高級中学。前身は日本時代の台湾総督府台北高等女子校）に編入（1948年7月卒業）すると、教育部主催の国語の作文コンクールで特等賞を得るなどすぐに頭角を現した。そして父の友人で陳家に入り出ていた民間紙『人民導報』（1946～47年）の編集長・蘇新（1907～1981）¹⁵⁾ に、『漂浪

¹³⁾ 前掲『陳真』、44頁。

¹⁴⁾ 陳蕙貞は日本を離れるにあたり、日本人の中国蔑視に対する批判を新聞に投書し（『読売報知』1946年2月14日、15日）、二日に亘り掲載された。しかし14日の掲載は編集部による改ざんが甚だしかったために、15日に原文が再掲載された。

¹⁵⁾ 台北県佳里生まれ。台南師範学校在籍時に日本人教師に抗議して退学。十七歳で東京留学し中学を卒業、東京外国語学校英文科に進学。28年、謝雪紅らによる上海台湾共産党の結成大会参加。同党東京特別支部に関わる。29年、四・

の子羊』を通じて文才を見出され、日本から帰って来た天才少女作家として、同紙に国民党治世下における台湾民衆の暗澹たる生活を訴えた投稿文を書くなどした。¹⁶⁾ しかし文筆家として華々しくデビューしたのもつかの間、47年に二・二八事件が起きると、父親の文彬とともに当局から粛清の対象と見なされることとなる。生命の危険にさらされた文彬は、家族を残して独り大陸に脱出する。台湾ではその後、粛清の勢いが厳しさを増し、蕙貞は身を潜めていた「台北赤十字病院」（現：台湾大学医学部附属医院）に居られなくなると、苗栗にある親戚の家に一人寄宿したり、また時には母と山中に潜伏したりと、数々の艱難辛苦を経てようやく台南に辿り着く。そこで父の友人の助けのもと、合流した母姉とともに命からがら香港へ脱出し、49年夏に天津を経て北京に至るのだった。

陳蕙貞はその後も、NHK ラジオ中国語講座の講師として1979年に再び日本の土を踏むまで、文化大革命下の中国において波乱に富んだ人生を歩むこととなる。だがここでは、『漂浪の子羊』執筆当時の経歴を述べるにとどめておきたい。

一六事件による同支部壊滅後帰台。31年、台湾共産党員の一斉検挙時に逮捕され、43年9月まで十二年間獄中にあつた。その間、『閩南話文法』『閩南話研究』を書く。45年、『人民導報』創立とともに編集長就任。『台湾評論』など雑誌紙編集にも従事。「二・二八事件処理委員会」の「三二条処理大綱」作成関与後、上海脱出。香港で『新台湾』創刊。謝雪紅らと「台湾民主自治同盟」結成。50年、華東人民広播電台台湾室主任。54年、中央人民放送局（現：北京放送局）移籍し台湾に向けての放送に関与。文革により、69年から74年まで河南省「五七幹部学校」に収容され労働改造を強いられる。78年、北京放送局にもどり、人民政治協商会議委員として来日。北京放送局でも陳蕙貞を支え続けた。81年、北京にて没（前掲『陳真』、66～68頁）。

¹⁶⁾ 陳蕙貞「日本より帰って（一）（二）」『人民導報』1946年3月7,8日。著者は野田氏のインタビューに対して、子どものような書き方をしないよう父から言われていたと述べている（前掲『陳真』、70頁）。野田氏は、この投稿記事の文体と、『漂浪の子羊』との同質性を指摘する。

1.2. 『漂浪の子羊』(1946)について

1.2.1. 出版の経緯

先述のように『漂浪の子羊』は、陳蕙貞が台湾へ帰る船を待つ一ヶ月の間に、日本での生活を振り返って書かれた半自伝体の小説である。台湾大学における教授¹⁷⁾と建国中学(現:台北市立建国高級中学。前身は日本時代の台北第一中学校)の校長を兼任し激務であった文彬は、この作品にとりたてて関心を示さなかったが、先述の蘇新の尽力によって世に問われることとなった。『漂浪の子羊』はもともと、光復後台湾で創刊された国営紙『中華日報』(1946年～)主催の懸賞小説に、第一位該当者なしの第二位で当選した作品であり、同紙での連載が企画されていた。懸賞小説の選考には、この新聞の「日文版」主編を務めていた作家・龍瑛宗(1911～1999)が関わっていたと考えられている。¹⁸⁾しかし省政府による日本語使用の禁止によってこの企画はとん挫し¹⁹⁾、私家版として出版が進められることとなる。小説『漂浪の子羊』は、1946年10月25日、李修(陳文彬の友人)、宋斐如(『人民導報』社長)、沈榮、林文樹、林以火、林江梅、林東淦、陳湖派、黃朝生(陳文彬の友人)、蘇連長、蘇新ら11名²⁰⁾の人々による資金援助を受けて、「陳蕙貞文芸出版後援会」の名で「新新月報社」から出版された。「漂浪の子羊」と真紅の筆で書かれた表紙の題字は、作者が希望を籠めて

¹⁷⁾ 論者は台湾大学文学院台湾大学文学院中文系にて、同院の『校史』に記載された歴代の教員名簿を確認したが、陳文彬の名は見つけられなかった(2018年10月29日調査)。当時の陳の在職状況については更なる調査が俟たれる。

¹⁸⁾ 下村作次郎著・黃毓婷訳「關於陳蕙貞《漂浪的羊》」(前掲復刻版『漂浪の子羊』収録)、6頁。

¹⁹⁾ 1946年10月22日の『中華日報』には「本社は発表と同時に紙上に連載する予定であったが、日文版欄廃止のために遂に実現出来なかったのは遺憾の至りである」との記事が載せられた。

²⁰⁾ 前掲『陳真』から、李修(文彬の中学の同級生。高雄出身。二二八時に救援のため500万元寄付して処刑される)、宋斐如(『人民導報』社長、台南出身、父・文彬と台中第一中学の同級生、北京大学卒業、東大大学院に学び、日本敗戦後に大陸から帰台。台湾省教育処副処長。国民党と対立して辞任、二二八後逮捕殺害。)、黃朝生(医師。文彬の中学同級生。二二八時に殺害)、蘇新(前掲)と言った人物の略歴を知ることができる(72頁)。

直筆したものであった。²¹⁾『漂浪の子羊』が出版されると、大陸の新聞『大公報』は、この天才少女作家のことを大きく報じたという。²²⁾この作品の大人びた文体には誰もが驚きを隠せず、懸賞小説の受賞や出版の祝賀会が開かれると、蕙貞はその祝賀の席で、自作かどうかを確かめるために小説を朗読させられたり、小説に出てくる歴史事実を解説させられるなど、不愉快な思いをすることにもなった。²³⁾

1.2.2. 小説の構成

『漂浪の子羊』は全55話、約167000字、192頁におよぶ長編の日本語小説である。台湾籍を有する上海帰りの「田一家」²⁴⁾が来日する1936年から、日本が敗戦を迎える45年にかけての、十年に亘る日本での生活が描かれている。父の尚文・母の玉華・長女の慧如・次女の慧真の四人家族が、激動の時期に、上海・神戸・東京・台湾・新潟・山梨（甲府日下部）と方々を転々とし、生活の中心となる東京でも、自由ヶ丘・中野区・経堂と、引っ越しをくり返す。タイトルである「漂浪の子羊」には、このような各地を流浪する少女の境遇や心理が象徴されている。

物語は、三人称叙述によって、田一家の家庭史が、母親や次女の内面を通して描かれる。そこに時折父にまつわる大小の事件が差し挟まれ、家庭の描写を中心にしたこの小説に時代背景を思わせる緊張感を与えている。

²¹⁾ 前掲『陳真』、71～72頁。

²²⁾ 論者未見。

²³⁾ 前掲『陳真』、74頁。

²⁴⁾ 作者陳蕙貞本人は東京生まれであり、執筆時までには渡華経験はない。しかし物語の主人公である田慧真は、台湾籍を有する上海帰りの中国人として描かれている。冒頭部の上海から日本へ渡る船上のシーンは、陳蕙貞が母の記憶をもとに描いたとされるが（前掲下村作次郎著・黄毓婷訳「關於陳蕙貞《漂浪の子羊》」、10頁）、こうした創作部分を小説に入れたところからも、「中国」との繋がりや「中国人としての意識」を前面に押し出そうとする作者の意図が感じられよう。

描写の中心となる場所は東京であり、作品の7割近くを占めている。次いで、疎開先（山梨・新潟）が2割5分ほどあり、残りは台湾への帰郷²⁵や、上海から東京へ移り住む冒頭の場面に割かれている。また、人物の描写について見ると、慧真5割、母3割、父2割弱という具合である。こうした紙幅の点から、本作品では東京を主たる舞台とし、田慧真が主要人物として設定されていることが分かる。

2. 先行研究

では次に、これまでの本作に対する評を見てゆこう。ここでは、論者が確認できた七篇について、以下概要をまとめてゆく。

(A) 「本社懸賞小説『漂浪の子羊』入賞 十四歳の少女に晴の栄冠」(1946)²⁶

この評は、私家版『漂浪の子羊』に先んじて発表されたもので、『中華日報』に掲載された懸賞小説入賞作品発表の記事に見えるごく短いものである。14歳の少女が書いた小説でありながら、「日本統治下における台湾一少女」が「精神的苦痛と祖国を忘れず、秘かに光復の日の到来を待ち詫びている心情を描写した力作」であり、「未来を囑望するに足る」作品、と紹介されている。陳蕙貞の「自序」の言葉を生かしたこれらの文言から、新たな未来を切り拓きつつある次世代の台湾少女に対する大いなる期待が読み取れる。出版当時、本作に言及した評はこの一篇のみであることから、同評は、1946年の紙誌における日本語使用禁止と47年の二・二八事件の後に日本時代の記憶に言及するこ

²⁵ 物語中、尚文は日本の特高に尾行されながら家族と帰台する。父の実家では、台湾語をほとんど解さない慧真姉妹が、親族と円滑に意思疎通できない様子が笑い話を交えて描かれている。たしかにここには、抑圧された植民地統治の様子は出てこない。しかしそれは、『胡志明』において主人公が渡華以前の「祖国」を観念的に捉え憧憬したように、東京で生まれ台湾に渡ったことがない作者が、まだ見ぬ両親の生まれ故郷を想像して描いたためなのかもしれない。

²⁶ 前掲「本社懸賞小説『漂浪の子羊』入賞 十四歳の少女に晴の栄冠」。

とが難しくなる前に公にされた、台湾人の良心による貴重な例と言えるだろう。

(B) 野田正彰『陳真—平和への旅路』(2004)²⁷⁾

生前の陳蕙貞と交流のあった野田氏は、本作は一人の少女が中国人女性として自己を確立してゆく様子が、1930年代から日本の敗戦までの東京における生活を通じて描かれ、そのなかで日本人の中国蔑視に対する抗議を訴えるだけでなく、東京に暮らす台湾人家族の生活風景や人間の感情の機微が巧みに描かれていることを指摘する。さらに、父・尚文は信念を堅持する厳格な性格でありながら、家族の団欒を大切にす娘思いの優しい父として、玉華は子どもを手塩にかけて育てる情の深い女性として描かれていることについて、実際には作者の父・陳文彬は子どもには冷徹なまでの厳格さであり、母・何灼華は優しく聡明でありながらも家事には疎い女性だったことを陳蕙貞本人へのインタビューを通じて明らかにしたうえで、著者にとって理想的な父母像が作品に投影されたとの見解を示している。

(C) 下村作次郎「關於陳蕙貞《漂浪的子羊》」(2005)²⁸⁾

日本語復刻版に「序」を寄せた下村氏は、本作の出版時期や、戦時下に中国人が受けた差別の実態が描かれている点に注目する。ここでは、吳濁流(1900~76)の小説『胡志明』(1946)との類似性や、『胡志明』が台湾・日本・中国を往来する「台湾人」の物語であるのに対し、本作は台湾出身の「中国人」による東京における物語であるとの相違点が指摘されている。また本作には、主人公が差別に屈せず前進しようとする姿が認められること、彼女の歴史や社会の認識方法が成人とは異なるとも述べられている。さらに、父・尚文は、家庭では厳

²⁷⁾ 前掲『陳真』72, 73 頁。

²⁸⁾ 前掲『關於陳蕙貞《漂浪的子羊》』、3~10 頁。

しい父として、外では厳格な言語学者としての側面を持ちつつも、弱者には優しいところもあること、彼の愛国精神に基づく社会活動や考え方は、同時代の台湾人作家の作品にはない知識人の形象であるとも評している。

(D) 紀奕川「台湾日本語文学中的家族小説——以『寒流暖流』、『流』、『漂浪の子羊』為例」(2008)²⁹⁾

本篇は、日本語復刻版の出版後、比較的早い段階で提出された学術論文である。紀氏は家族小説という側面から本作を読み解き、中国人であることを堅持する厳格な父や、優しく芯の強い子ども思いの母、そして民族差別によるいじめを受けても父母の前では弱音を吐かないけなげな姉妹など、『漂浪の子羊』に登場する家族の人物像や家族間の感情について論じている。ただし作品内容への踏み込んだ分析は留保されている。

(E) 黄英哲「台湾作家的「抗戦」書写——讀『漂浪的子羊』」(2015)³⁰⁾

中国語訳版に「序」を寄せた黄氏は、本作は巨視的視野のある作品とは言えないとしながらも、当時の日本に寄寓した台湾人の生活や心境が忠実に描かれている点を評価し、日本における台湾人の「抗戦」の思いが記された「抗戦」文学であると位置づける。

(F) 梅家玲「台湾文学史外一章——『漂浪的子羊』」(2015)³¹⁾

同じく中国語訳版に「序」を寄せた梅氏は、陳蕙貞という作家の女性や子どもの視角、そして台湾を離れ日本に暮らした戦時中の体験に

²⁹⁾ 国立中正大学台湾文学研究所修士論文。

³⁰⁾ 前掲『漂浪の子羊』収録(15～25頁)。その他に、同著者「從陳蕙貞到陳真——關於『漂浪的子羊』」『文訊』(2013年10月、18～20頁)がある。

³¹⁾ 前掲『漂浪の子羊』収録(11～13頁)。

基づく物語内容は、既存の文学とは異なる豊かさをたたえていると評する。梅氏は、台湾文学史の初期段階に活躍した女性作家がわずかに限られ、戦争・アイデンティティ・ディアスポラといった、大きなテーマを扱う女性作家の作品に至っては皆無とされてきたなかでの本作の登場に、大いなる意義を見ているのである。一方で、全般的に精緻な筆遣いながら、所々に描写の荒い部分やプロットの矛盾が存在する理由について、また「抗日/抗戦」の意識を具えた内容と、創作言語である日本語の間にある緊張感、中国人姉妹による中日両言語の認識のあり様、父が作る漢詩に対して娘が作る和歌・俳句というふうテキスト自体に中日両言語が混在する点は、議論に値するとの見解を示している。

(G) 王敬翔「離散少女、漂浪子羊 談陳蕙貞『漂浪の子羊』」
(2018)³²⁾

中国語訳版の訳者である王氏は、本作には日本統治期の台湾人少女の心象風景がよく映し出されていることを認めつつも、台湾人のアイデンティティといった植民地の本質的な問題は描かれていないことを指摘する。³³⁾ また、救国のために家庭を顧みない父の後景に位置する母娘の心情を、より詳しく検討する必要を述べている。

以上の評からうかがわれる本作の特徴としては、(1) 戦時下の日本に暮らす一人の台湾籍の少女の自己形成の様子が、その生活風景や心の変化を通じて描かれていること、(2) 中国人としての強い民族意識を持つ父の描写により、「抗戦文学」の一つの類型とみなし得ること、(3) 作者の性別・執筆年齢・公表時期・描写内容・言語といった諸点において、台湾文学史上異色の作品であること、(4) 描写の飛躍や

³²⁾ 『幼獅文藝』第774号、32～35頁。

³³⁾ ただし本作では、作品の冒頭部分において、父・尚文の台湾での植民地経験がわずかながら描写されている点は指摘しておきたい。

断絶の問題、日中両言語が用いられたテキストの問題については、更なる考察の余地があること、という四点に大きくまとめられるだろう。

このうち(2)について、各評は総じて父親の形象の特異性に触れたものが多いように思う。たしかに、強烈な中国人意識を具えた尚文は、同時代の台湾男性知識人の形象のなかでも珍しく、父親の思想が娘・慧真の考え方に大きな影響を与えているだろう。しかし一方で、尚文という「男性知識人」の形象から導き出される「抗戦(日)」という言葉によって、この物語全体を括ってしまうことは、作品解釈の可能性を狭めてしまうことにもなり兼ねない。先に見たとおり、物語の構成面からしても、娘・慧真や母・玉華の描写が、父の描写以上に大きな割合を占めていることは明らかである。そこで以下では、(4)の描写の飛躍や断絶という点に留意しながら、物語の主要な描写対象である「女性たち」に焦点を据え、彼女たちの描かれ方について見てゆくこととする。

3. 『漂浪の子羊』の女性像

3.1. 光復後初期台湾文学の女性形象と『漂浪の子羊』

本節ではまず、光復後初期台湾の言論界における女性描写の動向について、簡単に触れておきたい。論者はこれまでに、同時代の政府系一大紙『台湾新生報』に開設された「台湾婦女」欄(1947年8月10日～49年7月27日、女性問題を扱う専門欄)に掲載された新詩を分析するなかで、当時の文芸作品における女性像の特徴や女性の主体性の描かれ方を考察してきた。そのなかで、女性の手による女性像では、人権や貧困といったテーマが当事者の問題として描かれるのに対し、男性の手による女性像は、国家や民族などの政治的メタファーとして、あるいは男性の代替物として描かれがちであることを明らかにし、「女性」という文学表象は、当時においても書き手のジェンダーによって

種々の制約を受ける傾向があることを指摘した。³⁴⁾

では、この「台湾文学史上異色の作品」と称される『漂浪の子羊』の女性像はどうだろうか。まず、本作に登場する女性を拾い上げてみると、玉華（母）、慧如（長女）、慧真（次女）、藤井和子（カフェーの女給）、照子（田家の女中）、絹子（照子の従妹）、康女士（玉華の学生時代の親友）、宋美齡、堀江りつ子（堀江邑一の妻）、鈴橋先生（慧真の幼稚園の担任）、佐々木先生（慧真の幼稚園の担任）、乙川さん・村山さん（慧真の級友）、台湾の親戚のおばさんたち、黄雲錦（慧真の下級生で中華料理店の娘）、相川さん（慧真の同級生、いじめっ子）、野田先生（慧真の経堂国民学校の担任）、田舎の女子児童（疎開の勤労奉仕で共に働く）、長恩寺の寮母（児童疎開先の人）、バスガール（田舎者）、家主さん一家の女性たち（疎開先の人びと）、八幡校の女子児童（同級生、いじめっ子）、雨宮先生（山梨高女の担任）と、じつに 20 数人にも及ぶ。これらの人々はキャラクターが書き分けられており、出自や社会的地位、年齢も多岐に亘る。さらにこの小説には、1930 年代の日本の中流家庭で雇われていた女中・国民学校に通う日本人・在日中国人児童・学童疎開先の寮母など、作者自身の経験をもとにした作品であるがゆえの、新たな女性描写も認められる。とりわけ中国人少女の視線により、近代日本社会に特有の女中文化が映し出されている点は興味深い。呉濁流の『胡志明』（大陸篇、1946）に登場する上海の中国人中流家庭に雇われた阿媽の描写は、台湾男性主人公の同情と侮蔑が入り混ざったものであったのに対し、陳蕙貞の手により母親の視線を通じて描かれる日本人の女中は、朗らかで忍耐強く、生身の人間としての魅力にあふれている。彼女たちの台湾人家庭における立ち居ふるまいからは、これまでにない在日台湾知識人の暮らしぶりの一端をうかがうこともできる。

それでは、本稿が特に注目したい台湾女性の内面——主体性は、ど

³⁴⁾ 前掲「光復後初期台湾における女性文芸の発見」。

のように描かれているだろうか。以下、作中において中心的な人物である母の玉華、娘の慧真を中心に検討してゆく。

3.2. 玉華の場合——母と妻の狭間で揺れる台湾「新女性」

まずは、玉華の背景を確認しておこう。日本統治期に、「内地」留学した台湾女子学生の実態については、いまだ不明な点が多い。しかし例えば、呉笑（明治女学校、1899年～？年、台湾初の女子留学生）、蔡阿信（東京女子医学専門学校、1916～20年）、許世賢（同左、1925？～30年）、許秋槎（帝国女子医学専門学校、1938～41年）、陳進（東京女子美術学校、1925～1929年）のように、恵まれたごく少数の人々であったにせよ、このような台湾「新女性」はたしかに存在した。³⁵⁾ 小説に、上海から渡日し東京の街の様子を目にした玉華が、「学生時代に幾度も見た銀座と、今日のあたりに見る銀座を、心の中に比べ見て、近代都市の発達の速さに驚³⁶⁾く様子から、彼女もまた、東京で「内地」留学を経験した新知識人であることが分かる。そして、物語が始まる1936年の時点で、長女・慧如が六歳であることから、その留学時期は1920年代後半頃かと推測される。先行研究によれば、この間に208名を数える台湾女子学生が「内地」留学しており、そのうち半数が専門学校に留学したことが分かっている。³⁷⁾ また、これらの女子留学生の多くが男子留学生と同様にして、植民地下でも民族差別の影響

³⁵⁾ ただし、この台湾女性の植民地からの留学も、日本政府が「同化」を目的として推奨したものであったことを忘れてはならないだろう。磯部香「植民地「台湾」言説をめぐる日本女子と家族：明治期の女性向けメディア『女学雑誌』『婦女新聞』を分析対象として」『奈良女子大学社会学論集』第21号、2014年、8頁）参照。

³⁶⁾ 前掲『漂浪の子羊』、12頁、5～7行目。本論中、『漂浪の子羊』の引用箇所では、旧仮名遣いは現代仮名遣いで、漢字の旧字体は新字体で、踊り字はひらがなによる繰り返しで、またルビは該当箇所の後ろに（ ）を設けて示すこととする。

³⁷⁾ 渡辺宗助「アジア留学生と日本の大学・高等教育——植民地・台湾からの留学生の場合」（広島大学『大学論集』第2集、1974年）うち92頁記載〔表4〕「台湾女子留学生数の年度別変遷」参照。

を受けにくく社会的地位も高い職業として医師を志したことが明らかにされており、それは朝鮮など他の植民地からの留学生に比べても顕著であったとされる³⁸⁾。玉華のモデルである著者の母・何灼華もまた、「昭和医専」や「昭和薬専」で学んだ人であった。物語中、玉華はあくまでも家庭の主婦として描かれており、学生時代に医学を修めたらしい形跡は見当たらない。しかし40年代の台湾文学において、少なくともこうした「内地留学」経験をした高い学歴を有する台湾「新女性」が出てくる作品自体が——尚文という台湾男性知識人の形象と同様に——稀有なことであろう。

ではこのような背景をもつ玉華は、どのような「家庭の主婦」として描かれているのだろうか。はじめに、彼女の「妻」としての側面を見てみたい。玉華は、幼子二人をつれて上海から日本へ向かう船上で、日本の官憲に「尚文の地位が利用されねば、いくら自分達が監視されてもかまはない³⁹⁾」(下線は論者。以下同様)と覚悟を決めている。その後、夫が救国のために自分たちを日本に残したまま上海へ戻ると言い出した時も、漂浪生活のなかで「命のつな」と頼む夫と別れて暮らす不安に駆られ、「親に連れられてきすらい行く二人の児」を不憫に思いながらも、「公事は私事に代られぬ。愛国の士の妻は、雄々しく立ちて、夫を救国の旅途(たびじ)に旅立(だ)たせなくてはならぬ」⁴⁰⁾と、銃後をあずかる妻として自らを奮い立たせる。さらに、疎開先の不便な生活のなか押し寄せる郷愁に耐えながら、「吾が中国が此の戦争に勝つまでは自分たちはあらゆる辛苦を忍ばなくてはならない」、「中国が勝ち吾が台湾が再び明るい日の目を仰ぐ事の出来る日の必ずや有る」のだから「肉体的苦痛は何でも無い。」と自らを激励する。⁴¹⁾こ

³⁸⁾ 城田千枝子「ある台湾人女性の日本留学体験」『来日留学生の体験 北米・アジア出身者の1930年代』(マイグレーション研究会編、不二出版、2012年)、137～156頁。

³⁹⁾ 前掲『漂浪の子羊』、10頁、17～19行目。

⁴⁰⁾ 前掲『漂浪の子羊』、41頁、15行目。

⁴¹⁾ 前掲『漂浪の子羊』、168頁、15～17行目。

のようなところからは、夫と「抗日救国」の志をともにする女性として、「国」/「民族」のもとに自身を位置づけ、そのためには自己犠牲すら厭わない、近代国家の求める「理想的な国民像」が彷彿とされる。その一方で、夫の行きつけのカフェで働く哀れな女給・伊藤和子の身の上を案じて、お気に入りの中国服を与える場面や、また家庭の主婦として家をきりもりする場面からは、夫の家の外での人間関係までフォローする「内助の功」とともに、彼女本来の弱者に対する慈悲深い性格がうかがわれる。

次に、彼女の「母」としての側面を見てみよう。玉華は、各地を転々とする不安定な生活の中で、「可愛い児の為にはどんな苦勞をしても、長生きし」ようと考⁴²⁾え、物資が十分でない生活環境のなか、「費用の掛らぬ物で栄養たっぷりのお八つを」手作りする。⁴³⁾長女・慧如がジフテリアを患った時には独り看病をし、次女・慧真が学童疎開に行った時には、娘の身を案じて泣き暮らしたかと思うと、疎開先の新潟まで病床に伏した我が子連れ戻しに行く。こうした姿からは、我が子へのなみならぬ愛情やその行動力が感じ取れる。

他方で、近代教育を受けた女性らしく、女子教育に対する独自の考えも披露している。それは、西安事件で夫蒋介石の窮地に駆けつけ尽力した宋美齡を、現代女性の範として称える次のような場面に認められる。

玉華は彼女を、婦人として、全幅の信頼と、敬意を捧げ得る人だと信じ、且つ女の細腕一本で、滅亡の淵へ転(まろ)びそうになった中国を支(さき)え、建て直した胆量(たんりょう)に感心した。東洋の女性は余りにも封建的(ほうけんてき)な観念を持っている。女性は、家を守れば好いと言う考えは、すでに捨てて仕舞わなくてはならぬ、一世紀以前の思想である。現代社会は、婦人政治家のど

⁴²⁾ 前掲『漂浪の子羊』、2頁、11行目。

⁴³⁾ 前掲『漂浪の子羊』、29頁、13行目。

んどん登場せねばならぬ社会である。吾が中国で其のトップを切ったのが、国父孫文先生の夫人宋慶齡女士であり、蔣中正夫人、宋美齡女士であった。【略】将来、此の二人の児が、宋慶齡、宋美齡のように、立派な女になって呉れるだろうか。其れが、さすらい行く親の唯一の望みであり、頼みであった。(そうだ、其の為には、二人の児の教育には、細心の注意をそそがなくてはならぬ) 玉華は、覚悟を定めたのである。⁴⁴⁾

このような描写からは、漂浪の身では自らの行き先も覚束ないが、せめて子どもが将来女性として活躍するための礎を作ってやろうとする切実な思いが伝わってくる。このような思いが先に見た我が子への献身的な行動として表れているのだろう。もちろんそこには、宋美齡の勇敢な行動に励まされた、夫の志を支える一人の「新女性」としての自負も重ねられているに違いない。それは、日本に取り残された郭沫沫若夫人や、思想犯として夫を日本に送還され上海にひとり残る堀江夫人の窮地⁴⁵⁾に際して、面識がなくとも同志として駆けつけようとする場面にも見ることができる。

玉華にとっては、中国人としての民族意識を堅持し、「抗日救国」の活動のため「一門一族の繁栄利得等は、二の次三の次」⁴⁶⁾と邁進する夫を助けることは、「妻」として第一の務めであった。その一方で、幼

⁴⁴⁾ 前掲『漂浪の子羊』、42頁11行目～43頁2行目。

⁴⁵⁾ 前掲『漂浪の子羊』:「日本に亡命した郭先生は、今次事変〔盧溝橋事件一論者注〕が起ってから祖国の危急を見るに見かねず、遂に、千葉に在住(ざいちゅう)する妻子(さいし)にも、志を告げず、日本を脱出(だっしゅつ)して、祖国へ帰って仕舞(しま)ったのである。【略】尚文から、話を聞いた玉華は、秘かに郭夫人を慰問しようとしたが、事変勃発以来、益々(ますます)特高警察の監視が厳しくなった為、遂に果たせなかった。」(58頁15行目～59頁7行目)、「不幸にも、堀江おじさんは、思想犯として、日本へ連れ帰られて投獄された。後に残されたりつ子夫人は、すぐ淋しく後を追うて帰国しなければならなくなったのである。玉華は其の間、淋し気なりつ子夫人を、見舞いに行こうかと思ったが遂に果たせなかった。然し、顔は未だ見知らぬけれど、玉華とりつ子夫人は、既に心の友であった。」(48頁、12～15行目)

⁴⁶⁾ 前掲『漂浪の子羊』、74頁、4行目。

い命を育み娘を立派な女性に育て上げる大事も、「母」として担う必要があった。

このような「妻」と「母」という二つの役割は、「宗主国日本」という生活環境下では、時に激しく矛盾を生じるものでもあった。小説では、靖国神社祭の祝日に日の丸を玄関先に掲げようとした玉華を尚文が阻止し、叱りつける場面がある。彼女にとっての国旗掲揚は、「どこへ行っても純粋な中国人だけれど、日本に居るんですから、矢張り、旗をかかげた方が、目立」たないという、「宗主国」社会の中で台湾人一家が安全に暮らし、わが子がいじめられないようにするための方便であった。しかし彼女の考えは、あくまでも中国人としての民族主義を貫こうとする夫の尚文からは、「僕達は日本国民じゃ無いから、そんな必要は無い！」と一喝されてしまう。⁴⁷⁾ 玉華はここでおとなしく引き下がることになる。小説では、あっさり描かれている場面だが、この話は、陳蕙貞の家に起きた以下の事件をもとに書かれたものであった。在日中国人家庭における、夫婦の力関係を映し出した一コマとして、野田氏の伝記『陳真』から関連箇所を見ておきたい。

陳文彬は娘を堀江の家にあずけたものの、国籍を変えさせようとはしなかった。「お前たちは中国人だ」と常日頃から言いきかせ、中国語の標準漢語を憶えさせた。政治的信念に貫かれて中華民族主義を守り抜こうとする文彬は、少しでも妻が日本社会に妥協しようとすると激しく攻撃した。／妻の何灼華は高等教育を受けた聡明な女性だが、お嬢さんとして育ち、政治的信念は何ももっていなかった。ひたむきに娘を愛する灼華は、娘たちが中国人だと言っていじめられることに耐えられなかった。／そのため、いわゆる旗日（はたび）にはとりわけ苦しんだ。日の丸の旗を掲げよ、と彼女は隣組から呼び出されて怒られる。旗を掲げないと窓ガラスを割られ、そのたび

⁴⁷⁾ 前掲『漂浪の子羊』、73頁、11, 14行目。

に修理をしなければならない。塀には売国奴と落書きされる。学校に通っていた姉の蕙娟は、通学途中に男の子に殴られるので、いつも従兄弟が護衛して登校しなければならなかった。灼華は、「なにも旗を出したぐらいで、自分たちが中国人であることを忘れてたりしない。心のなかで国を愛しているんだから、いいではないの。どうしてこんなに娘がいじめられないといけないの」と夫に逆らった。／文彬は、「これは原則の問題だ。気持と行動を分けることはできない。私の仕事の都合で日本で暮しているだけであり、中国人として、日本の旗を掲げることは許さない。」と叱りつけた。こんな口論が旗日になるとくり返された。／ある日、文彬が出張していた日、灼華は隣組が持ってきた旗を掲げた。そこに文彬が帰って来た。彼は包丁を出して、大騒ぎとなった。従兄弟や叔父たちが必死になって父を止め、母を逃がした。母は娘二人の手を取って、親戚に避難、しばらく家へ帰らなかった。⁴⁸⁾

先に見たような、玉華が現代女性の模範とした宋家姉妹の例を踏まえれば、高学歴の台湾女性が政治的信念を持たないことを、お嬢さん育ちという理由によって片づけることはできまい。

小説の描写を陳家の実話に照らした時、小説に書かれていない——おそらく書くことができなかつた——「宗主国」に住まう「女性」かつ「被植民者（あるいは二等国民）」という二重のマイノリティとしての玉華が、新・旧の価値観や、「妻」と「母」の役割の狭間で、ひとり苦悩する姿が浮かび上がるように思う。

3.3. 慧真の場合——在日中国人少女の主体性の確立

3.3.1. 民族差別と父由来の中国人意識

慧真の中国人意識の覚醒は、大きく二つの出来事により促される。

⁴⁸⁾ 前掲『陳真』、33～34頁。

その一つは民族差別である。慧真は、姉と同じ自由ヶ丘幼稚園⁴⁹ に入園し、自由ヶ丘・新井・経堂、そして山梨の国民学校を経て、山梨高女というように、転校を繰り返す。家庭の外で他者と関わりを通じて社会との結びつきを深める子ども時代を、教師や同級生から差別されながら過ごすことになる。慧真の差別との戦いは、幼稚園の担任から発せられた「支那人のように悪いヒトになっては不可（いけ）ませんよ。⁵⁰」という言葉に始まる。国民学校に入学すると、男子生徒から苗字の「田」を「デン」と茶化されたり、「チャンコロ」「支那人」「ポコペン⁵¹」「支那の敗残兵」といった中国人に対する蔑称を投げつけられ、時には何十人もの男子に追い駆けられて、暴力を振るわれる。小説中、1939年から41年の間に、こうしたいじめの場面が三回にも亘り出てくるところからも、この被差別体験が創作の根幹をなす重要な出来事であったことがうかがい知れる。慧真は母から、よい成績を修め皆から一目置かれればいじめが止むのではないかと言われ、努力のすえに男女混合クラスで一番になり級長に選ばれる。しかし果たしてここにおいても、「中国人」のくせに、「女」のくせに生意気だと、母と同じ二重のマイノリティとして責めを負うこととなる。しかも級友たちの前で担任からも侮辱をうけることになるのである。

優等賞の第一位を占めて、芽出たく三学年を修了した慧真は、四年に進級する組代えの時に水島孝一先生の担任する男女組に入れられた。【略】水島先生は一見してすぐ、長らく兵隊教育を受けた者と分る。如何にも横柄そうな、そして形式的でいつもこわばったよう

⁴⁹ 黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』（1981年、講談社）で名が知られる、戦前にリトミック教育を取り入れた私立幼稚園「トモエ学園」（東京都目黒区自由ヶ丘）のことかと思われる。

⁵⁰ 前掲『漂浪の子羊』、61頁、3行目。

⁵¹ 金水敏著『これも日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』（岩波書店、2014年）は、「ぼこべん」は「不穀本児」すなわち「元値が切れて売れない」という語が「幾多の変遷を経て」こうなったものと推測している（同書、115頁）。

な表情をしている。【略】「田慧真（でんけいしん）」／「ハイ！」／先生は、ニヤニヤ笑いを口もとに浮かべて聞く。／「お前は支那人か？」／慧真は、／「はい中国人です」／「支那人でも、中国人でも同じ事じゃねえか、「はい」と返事すれば好いんだ」／水島先生の声は荒かった。慧真は躍起となって言った。／「先生！違います。支那人とは中国人を侮蔑した言い方です」／どこか教室の隅で「クスクスッ」と笑う声が、彼女の興奮した耳に入って、一そう神経をいら立たせた。／「止める、止める、もういい、坐れ」／水島先生が手を振って叫んだ。慧真は口惜しさと烈しい悲憤に口唇を噛みしめて座った。【略】教職に就いている者にはあるまじき民族の差別を為し、中国に対する認識に欠けている、水島教師に対する痛憤が、ギリギリと胸を噛んだ。然しこうした間違った考えを持つるのは水島教師一人のみでは無い。彼は少数の人を除いた殆どの日本人の心の中に持つ、考えを反映した端的象徴であり、たまたま一中国少女が発見した一分子に過ぎぬ。「中国人」と言えば、「アア、チャンコロか」と、すぐに軽蔑する。こう言う非人間的な観念は徹底的に撤廃させねばならぬ。これは一人慧真のみならず、全中国人の心からの叫びであった。【略】「アア中国人の子供とは此んなものか」／と思われたら其れまでである。其処は慧真の小さいながらも中国人としての誇りを持つ、確固とした意地が許さなかった。／「中国人は立派だ」／と、水島教師の誤れる考えを根底から、くつがえして中国人と言う民族を新しく、見直させなければならない。⁵²⁾

じつはこの場面も、教員からの侮蔑に反論した作者が殴打され、学校を退学するに至る事件をもとに書かれた箇所であった。⁵³⁾しかし小説では、暴力的描写は避けられており、慧真は父母に心配させまいと、

⁵²⁾ 前掲『漂浪の子羊』、105頁7行目～110頁6行目。

⁵³⁾ 前掲『陳真』、41～43頁。だが、ここにも良識ある日本人の美術教師の像は認められる。

わが身に降りかかる災難を黙って耐え忍ぶ。引用の傍線部にみられるように、慧真が憤りながらも冷静に教員の偏見を日本人全般にみられる悪弊として相対化している点に注目したい。他所においても、日本社会に蔓延する中国人差別に対して、同様の観点から批判が展開されている。例えば、いじめっこから、「おれ達は、お前が級長になるのをいじめるんじゃない。支那人は悪いから征伐するんだ。」と不条理な言葉を投げかけられた時には、彼らがこうした考え方をするのは、「支那ポコベン」の首を十もぶった切った」と「駄法螺を吹いた戦地帰りの兵隊が、「中国とは弱い国」「中国人は悪い人間」だという誤った観念を、少年たちの心に植えつけた⁵⁴⁾ せいだと、軍国主義にまみれた刷り込み教育の弊害を痛烈に批判している。また、自国を「世界一の強国」「文化国の第一位」であると自惚れ、中国や諸国を軽んじるような、「冷静になって考え、物事を観る正当な目が無い」「日本人の大部分」こそ、「野卑」「残忍」「無情」「傲慢」⁵⁵⁾ であり、「矛盾」だらけで「形式主義」に充ちた「日本の神代以来の歴史」こそ、その低い文化水準の表れである⁵⁶⁾ とも痛罵している。こうした批判の矛先は、人間の内面に巣くう嫉妬やいびつな歪みにも向けられる。例えば、疎開先の学校で、担任に可愛がられる慧真に嫉妬した女子児童が、男子児童を操っておこなった陰湿ないじめに対して、それは「人の心の浅間しき⁵⁷⁾」の所以だと指摘している。ここでは、子どもがもつ大人と同じような卑屈な心理や、同性の狡猾な醜さが暴き出されているだろう。このような、物事を相対化したりその本質を掴むすぐれた洞察力に、陳蕙貞という若き作家の眼力を見る思いがする。

もっともこの作品には、日本社会の負の側面ばかりが描かれているわけではない。学校という不条理な社会においても味方をしてくれる

⁵⁴⁾ 前掲『漂浪の子羊』、122 頁 4, 7~9 行目。

⁵⁵⁾ 前掲『漂浪の子羊』、71 頁、4~8 行目。

⁵⁶⁾ 前掲『漂浪の子羊』、85 頁、12~14 行目。

⁵⁷⁾ 前掲『漂浪の子羊』、177 頁、13 行目。

友人や、偏見のない教員もいること、中国人と分かるなり態度を豹変させる巷の大人とは対照的に、慧真を我が子のように可愛がる堀江夫妻、病床にある慧真を手厚く看護する学童疎開先の「長恩寺」（新潟）の寮母、疎開先（山梨）の親切な家主一家といった、良識のある日本人も多く書き込まれているのである。こうした日本人の形象は、楊達（1905?～85）の「新聞配達夫」（1932）や『胡志明』にも認められるものだが、本作には、慧真という子どもの視線を通じて、老若男女を問わず、より多様な良心的日本人が素直に映し出されている。また慧真は、母親譲りの性格のゆえか、異郷に暮らすマイノリティという立場のなせる業か、弱者の哀しみを推し量る心にも秀でていいる。例えば、自らがいじめの渦中にありながら、自分が学校を卒業した後に、後輩の同胞少女にいじめが集中することを案じている。⁵⁸ それは、子どものいないりつ子おばさんの言い知れない哀しみを察する心にも通じているだろう。

多くの時間を日本で過ごし、すでに日本語の方が中国語よりも上手く操れるようになった慧真にとって、「日本」は、父にとっての親族を殺した憎むべき相手とはまた異なる意味を持つ。それは、自らを害する場であると同時に否応なく自らを育み、自己形成を促す場でもある。慧真の心理描写からは、複雑な環境のなかで、一人の在日中国人少女の主体性が確立されゆく様子が認められるように思う。

次に、慧真の中国人意識を導いたもう一つの力として、父の存在について見てみたい。多くの中国人女子留学生が父の影響のもとに内地留学を決める傾向があった⁵⁹ のと同様に、慧真も父の影響下に中国人としての矜持を持ち、度重なる民族差別にもめげず奮起しようとする。たとえ相手が教員であっても、誤った事をすれば反論し、腕力ではか

⁵⁸ 国民学校に通っていた中華料理店の少女の出身が広東であり、父が苦力出身で子どもに十分な教育の力を注げなかったため、落ちこぼれていたことも書かれている。戦時下の在日中国人児童の状況を描写した貴重な一場面だろう。（前掲『漂浪の子羊』、110, 111 頁。）

⁵⁹ 前掲「ある台湾人女性の日本留学体験」、142 頁。

なわないいじめっ子の集団にも飛び掛かってゆこうとする。このような正義感に溢れた性格は、父親譲りのものと言え、彼女の有する中国人意識も父親の強靱な信念に間違いなく影響されているだろう。しかしそんな彼女でも、日々繰り返される際限のないいじめに、心が弱くなる場面がある。小説では、慧真が、学校の帰り道にひとしきりいじめられたある日、「名前が田澤だったらきつといじめられない」と友人から言われたことを受けて、愛娘の願いならば叶えてくれるだろうと、無邪気な気持ちで、父に改姓名を申し出る場面がある。

「ねパパ、あたし達の名も田澤とか田村とか日本の名にしてよ。」
／尚文の顔色がサッと変った。怒りと悲しみの混じった顔であった。
／「お前が……。僕の子たるお前が其んな浅ましい事を考えるようになったのか……………」尚文の声は震えている。／「僕達は純粋な中国人だぞ！」／此の一句に慧真は翻然として悟った自分の心が知らず知らず邪道に入って仕舞ったのを……………／自分ながらも浅墓な事を考えた慧真は後悔した。／「ああ僕は驚いた。賢い子とっていたら何だ。お前が其んな心を持っていたとは……………」／尚文は目を閉じた。慧真は心秘かに自分を恥じた。慧真の痛い心には父の声がたまらなかった。【略】「慧真！もう此んな悪い考えを起こして呉れるな。」／【略】「あく迄も中国人として正しく生きるのだ！」／尚文の力強い声……………。／慧真は（そうだ。あたしはどんな辛苦をも克服してあくまで“壊東西”（悪者）に対抗するのだ。誘惑の手に乗らないように心を引きしめて……………）心の中でそう叫んだ。⁶⁰

小説では、父の表情の変化に瞬時にして娘が自らの過ちを悟り、正しい道を歩む決意をするまでが、よどみなく書かれている。しかし実はこの場面も、先述の旗日事件と同じく、陳家の実話がもとになった

⁶⁰ 前掲『漂浪の子羊』、123頁8行目～125頁11行目。

一段であった。以下の『伝記』の引用により、実際にはこの話が相当「美化」され、「脚色」されていることが分かる。

あるいは、改名が父にばれたこともあった。文彬は「さだちゃん」とかいった呼び名は許した。だが改名は絶対に許さなかった。学校に通い始めた姉は、再三改名しろと言われ、彼女自身も中国名だといじめられるのでそれを望んでいた。母が学校に呼ばれ改名を求められたとき、ついに陳の旁（つくり）を採って、「東（あずま）」に変えることに同意した。／ある日、それを知った文彬は激怒し、母の首をつかんで何度も何度も本箱に叩きつけた。姉妹は床に正座し、泣きながら、／「マミを赦してあげて」「マミを赦してあげて」と頼んだ。／姉の蕙娟は傍らで、／「私が悪いんです」と泣きじゃくった。／母は崩れ落ち、ぐったりとして何も言わなくなった。あまりのことに、若い従兄弟が後ろから父を羽交締めにして止めた。家長・文彬はさらに怒り、抑える青年の肩に噛みついた。／この間、少し息をついた灼華は、再び、／「蕙娟がいじめられてもいいの」／と口答えた。我を忘れて文彬は机の上にあった鋏をつかみ、投げつけた。／灼華に投げた鋏は、半分立ち上がって謝っていた蕙娟の頬に刺さった。するとぐったりしていた灼華が飛び上がり、頬から鋏を抜き、娘を抱いて裸足で駆け出した。その後を従兄弟たちが追い、陳蕙貞さんも走ってついていった。彼女は泣き声も出ず、ただ涙が流れ続けたことを憶えている。【略】しばらく陳真さんはこの出来事を夢に見た。そして父を恐れ、父になつけなかった。だから父も自分かわいがってくれなかったのではないか、と思ひめぐらす。／陳文彬は全身全霊をもって日本帝国主義と闘っていたのであり、その緊張が優しい妻と無邪気な娘たちをどんなに苦しめていたか、気づくことも、認めることもできなかった。⁶¹⁾

⁶¹⁾ 前掲『陳真』、35～36頁。

家族を守るべき立場にある父が、家族に刃を向けるという、あまりにも衝撃的な出来事を目の当たりにして、作者が父親に対して抱いたであろう衝撃と失望、そして憎悪は計り知れない。しかし、小説に描かれた尚文は、志を貫くためには家族に有無を言わせない頑固な父親ではあるが、感情のままに家族を傷つけたりはしない。あくまでも娘の良き父親であり理解者であり続ける。小説にみられる不思議なまでの主人公の従順さの裏に、これほどの悲話が隠されていたこと、虚構の父と現実の父との乖離からは、理想の父親像を追い求め、自分の分身である「慧真」を通じて虚構の世界で父に認められようとした／父の愛を得ようとした、少女陳蕙貞の悲痛な心境が読み取れるのではないだろうか。

以上が、次女・慧真が外から植え付けられた「中国人としての意識」の芽生えのプロセスである。

3.3.2. 「生」に対する自発的意識

最後にもう一つ、民族差別や父といった外から受ける影響とは別に、慧真が自発的に覚醒せざるを得なくなった出来事を見ておこう。それは空襲である。一家は山梨の疎開先に戻ろうとした日に東京駅で大空襲に遭遇する。爆弾投下により、周囲が火の海となる中で、慧真は否が応にも死と向き合うことになる。ここでの、母の玉華と慧真の死に対する描写は対照的である。玉華が、「死んだって好いよね、親子四人で一緒に死ぬくらいなら好いよね」と諦観するのに対して、慧真は死と隣り合うことで生への執着を覚えるのである。

慧真の頭にいきなり死がハッキリと浮かび出た。死とは何だろう。

【略】彼女は一瞬後に此の防空壕に二百五十キロ爆弾が落下して自分達が簡単に死の世界に行って仕舞う事を繰り返し繰り返し考えた。生と死とは紙一重のへだてである。其の時慧真の上半死に吸い取ら

れた心に猛然として生への執着が頭をもたげた。／（此のまま死んでは無らない。自分はやらなくてはならぬ仕事がある筈だ。其れは何？人間は必ず何時か三途の河を渡らねばならぬ。其れは運命であり生物の不可抗力である。死ねば肉体は残らぬ。魂も残らぬ。只一つの手段として自分が死んでも魂は其れに依って後世まで残る事が出来るのである。【略】自分も何か為さなくては！今ムザムザと死んで仕舞ったら犬死である。然も台湾の黎明の輝やかしき日を見ずに…………。）⁶²

極限状態を経験することで、生に対して自覚的になった彼女は、自らがこの世に生を受けた証を残したいと強く願うようになる。自発的な行動と言う意味では、彼女が疎開先で離れた家族を偲んで作る和歌も同種の行為であろう。しかしここでの感情は、主体性と呼ぶにふさわしい、自身の内部から激しく突き上げる欲望なのである。

4. 今後の課題——結びにかえて

ここまで、『漂浪の子羊』の母と娘の内面意識に注目し、彼女たちの主体性やその変遷の有り様を見てきた。そこでは、二重のマイノリティである台湾「新女性」の内的矛盾や、在日中国人少女の自我覚醒の過程が、民族差別・父との関係・空襲体験の場面に認められることを論じてきた。

今後は、これらの形象の文学史的意義を掘り下げるべく、(1) 在日朝鮮人文学や同時代の台湾男性作家の小説にみられる女性形象と比較するなかで、本作の女性像の特徴を引き続き検討してゆきたい。(2) また本稿では詳しく論じることができなかった言語問題についても考えたい。先行研究も指摘するところだが、このテキストには、父・尚文の「漢詩」（著者の父・陳文彬の提供による）と娘・慧真の「和歌」

⁶² 前掲『漂浪の子羊』、172頁14行目～173頁11行目。

に代表されるように、日本語と中国語（ときに台湾語）が混在している。またそれだけでなく、日本語でも、甲州弁（山梨方言）や新潟方言、男言葉と女言葉などが状況に応じて書き分けられているところからは、著者の言葉に対する鋭い感性がうかがわれる。（3）そして、情景や心理描写に長けた本作が、同時代の、とくに日本の女性文学からどのような影響を受けているのかについても考えたい。以上の諸点に取り組むなかで、作品の文学史的意義を考究したいと思う。

【参考文献】（本文に記したものは除く）

- ・アジア女性史国際シンポジウム実行委員会編『アジア女性史 比較史の試み』明石書店、1997年。
- ・洪郁如『近代台湾女性史 日本の植民統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2001年。
- ・竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史』田畑書店、2001年。
- ・香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育 機会拡張と社会的相克』昭和堂、2008年。
- ・中井亜佐子・吉野由利編著『ジェンダー表象の政治学 ネーション、階級、植民地』彩流社、2011年。
- ・宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために』岩波書店、2014年。
- ・陳蕙貞著・王敬翔訳『漂浪的子羊』（台湾文学与文化研究叢書 文献篇5）台大出版中心、2015年。

【付記】

本稿は、「第二回台湾文学学会」（於国立台北教育大学、2018年10月28日）において、「挖掘光復後初期台灣女性文藝活動：以 陳蕙貞《漂浪的小羊》的女性形象」と題し発表した内容を改めたものである。発表当日、貴重なご教示をいただいたコメンテーターの張文薰先生（台湾大学）、また有益なご意見をいただいた王敬翔博士に、篤くお礼申し上げます。さらに後日、梅家玲・高嘉謙両先生（ともに台湾大学）か

ら、本研究に関する重要な示唆を受けました。併せてお礼申し上げます。

本稿は、科学研究費：基盤研究（C）（18K00360）「戦後初期(1945～1949)台湾における女性文芸の発見とその展開」の成果である。